

筑波大学附属久里浜特別支援学校

平成 29 年度 自閉症教育実践研究協議会を開催しました

平成 29 年 12 月 8 日（金）に、平成 29 年度自閉症教育実践研究協議会を行いました。本年度は、「子供たち一人一人が確かに育つ授業づくり【3 年次】～根拠ある指導計画の立案を通して～」をテーマに掲げ、事例研究と授業研究を進めてきました。

午前中は、研究概要説明の後、授業公開、授業研究会を行いました。授業研究会では、まず、授業者から指導計画を見直してきた経過を説明しました。その後、公開授業における子供の評価を基に、教師の関わり方や教材・教具などの指導に関することや、各学級の協議の柱を基に話し合いました。「授業の中で子供に身に付けさせたい力は何か」、「何を、どのように教えるか」、「子供の表現を引き出すためには、教師はどのように関わればいいのか」など、指導目標、指導内容・方法について様々な視点から議論を行いました。

午後は、まず、研究所の体育館でポスター発表を行いました。各教師の指導事例、養護教諭や栄養教諭の授業実践、寄宿舎の生活指導や行事の取組、小学部の学部集会や特別活動の取組、幼稚部の家庭生活支援や地域との連携、本校のアセスメントの取組など、34 本のポスターを発表しました。子供との関わり方や授業を見直してきた経過、指導について議論したり、地域との連携の在り方など、互いの学校の取組について情報を交換したりしました。

次に、研究所の講堂ステージで幼稚部 4 歳児、小学部 3 年生、小学部 6 年生の指導事例を報告しました。それぞれの子供が、どのような指導を通して、どのように変容したのかについてまとめ、映像やエピソードを交えて報告しました。三つの指導事例について、指導助言者の野呂文行先生（筑波大学人間系教授）からは、「これまでの事例研究から明らかになったことから、知的障害を伴う自閉症児の教育について提言できることを考えてほしい」と次の課題を指摘していただきました。また、田中真介先生（京都大学国際高等教育院准教授）からは、「子供の多様なサインを受け止めることが久里浜特別支援学校の実践の良さではないか」という意見をいただきました。

参加者の皆様からは、「実践を記録し、まとめることは大切だと感じた」、「子供の発信を受け止め、安心して取り組めるような先生方の工夫がされていると思った」、「もっと教材を見たかった」、「指導でうまくいかなかったことも知りたかった」といった意見や感想をいただきました。

実践研究協議会での議論を踏まえ、引き続き、子供が何を学んでいたのか、何を学べていなかったのかを評価し、その原因を明らかにして、授業を見直し、子供が確かに育つ授業を追求していきます。

ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。3 月の「実践研究集録」の発送をお待ちください。



公開授業



授業研究会



ステージ発表



ポスター発表